

地球時代の選択肢
南アフリカに移住した家族
吉村 稔・吉村峰子(南アフリカ・ダーバン在住)



第 65 回

英語と料理

今から 40 年近く前、新婚時代の私たち夫婦は、夫の尊敬するある大学の教授の家にご招待されました。仲の良いご夫妻に国際協力の現場の話しや、途上国の現実やいろいろなお話を伺いながら、美味しい手料理をご馳走になりました。

その席でご夫妻がおっしゃったことをまるで昨日のように思い出します。

「これからの時代は女性男性が一緒ががんばる時代。それぞれきちんと専門職を持つこと。そして、その上で英語とお料理もできること。英語でコミュニケーションを取る、どんな場所でも素材から料理ができる。美味しいものを一緒に食べて世界各国の人たちとシアワセな時間を共有する」

その時、とても勇気をもらった気がしたのです。

元々私は英語や日本語を教える教師です。が、実は中学生・高校生の頃より多忙だった両親に変わり夕ご飯の支度をするのはまったく苦にならなかったのです。

米国の留学時代、料理が好きだった私の周りにはいつも多くの友人がいました。

「すき焼きを作って」
「日本のステーキソースってなに？」
「天ぷらが食べたい」

その頃はインターネットなどない時代です。すべての外国の食べ物は書物かテレビ、映画などから情報を仕入れていたのです。

そんな学生時代を過ごした私でしたが、まさか数十年先に「仕事」として料理をするようになるとは想像だにしていませんでした。

今年、南アフリカ・ダーバンでの生活も 20 年目に突入しました。移住当初は夫が日本車や日本のバイクの輸入で生計を立てたり、私が通訳や翻訳の仕事をしたりしていました。その数年後からは日系企業で日本語や英語の教育に携わるようになりました。

ところが、同じように南アフリカに移り住んでいた私の妹が、滞在 10 年後に日本へ本帰国することになり、彼女が始めていた日本食のお弁当事業を私が引き継ぐことになったのです。

そもそも私の家のスタッフ・プレシャスにはかれこれ 20 年に渡り日本の家庭料理を教えてきており、彼女がメインのキッチンスタッフとしてお弁当事業を引き継ぐことは当然の流れのようでした。私は最終的な責任者ですが、語学事業や通訳業なども同時進行しており、全面的にお弁当事業には関われないことも明確でした。

ただ、毎日 20~40 食の注文もいただき忙しく事業は展開していきました。コロナ渦中の全面的なロックダウン下では 1 か月ほど休業を余儀なくされましたが、その後順調にお客様も戻り現在に至ります。

そして、2023 年の 1 月に以下のような打診を受けました。

「2023 年 5 月に世界卓球の決勝戦がダーバンで行われます。日本のテレビ東京が世界放送権を獲得し、テレビ局などのスタッフ約 80 名のお弁当をお願いできますか？」

私のキッチンのごく普通の一般家庭のキッチンです。せいぜい一回の上限は 40 食です。その倍のお弁当を 18 日間連続で昼食・夕食を提供する、というのはなかなか無謀と言ってもいいくらいの冒険です。

プレシャスとスタッフたちに聞いてみました。すると、彼女たち、満面の笑みを浮かべて、

「もちろん！できますとも！」

という即答でした。

私は経営者として腹をくくり、この私たちのお弁当事業が始まって以来の最高の注文数をこなすためには何が必要か、と考え始めました。

まず、それまで 3 名の調理スタッフ、1 名の調達・配達スタッフで事業を進めていたのですが、調理スタッフを一名増やすことにして、1 月から訓練を始めました。



ガスコンロ：息子が壊れた洗濯機の外側などを再利用して作ったもの

その他、敷地内に青空キッチンの増築、お米を炊くための圧力鍋を含めたお鍋類、紙容器の買い足しなど、とにかく考えられる必要な用品の購入などにかかなりの時間と費用をつぎ込みました。



青空キッチン♡



また、期間中必要な食品の確保にも苦勞しました。

ダーバンには中国人・台湾人の経営するアジア食材スーパーが何店かあります。ところがほとんどの品物がそれらの国からの輸入です。よってウクライナでの戦争が原因の世界的規模で問題になっていたコンテナ船の到着遅延の影響がダーバンでも起きていたのです。

普段、私たちはオーストラリアか米国で生産された短粒種のお米を圧力鍋で炊きお弁当に使っています。南アで栽培されるお米は大半が長粒種米で日本のお弁当には不向きです。

そのお米が店頭にし少ししかなかったのです。大慌てでダーバン中のアジア食料品店に交渉し、なんとか通常の何割増しの費用を払い、18日間に必要なお米を確保したのが、大会が始まる数日前でした。

日本のようにお店に行けばなんでも買える、という環境ではないのです。最終的にはそこに通じている人たちにアプローチし融通を効かせてもらう、というある意味、人脈がものをいう世界です。

幸いなこと、普段のお付き合いが功を奏し何とか18日間のお弁当事業が始められることになりました。

提供させていただいたメニューや18日間の奮闘ぶりは、次号をお楽しみに。